

## 雜 錄

## 藝術的活動の本質

中 川 得 立

Fiedler : Ursprung der künstlerischen Thätigkeit.

Max Tappanel: Vom Monet zu Renoir.

藝術家が繪畫や彫刻を創作する働きは藝術が作品を通じて自らを體現する過程であるとも見ることもができる。藝術とは何であるかといふ問ひはそれであるから藝術創作の本質と藝術的勞作の意義とを尋ねることになるであらう。そしてこの本質と意義とを求めて吾々は常に創造 (Das Schöpfensche) の前にたゞずむ。藝術は創造を以て外にはない。創造は藝術を外にしてはあらはれ難い。藝術の本質を理解するといふのは藝術作品に於て

この働きを見ることである。この働きを見ることは藝術的勞作の創造性をその働きの本質から洞察することに外ならぬ。藝術の對象とは何であるか、それを今問ふのではない。藝術的意識の法則を問ふのである。美とは何であるか美は假象にあるか實在にあるか、それも今の問題とはならぬ。吾々の問題は藝術上の眞である。藝術的意識の起源を求めるといつてもそれは心理現象としての藝術家の意識が何處に始まりいかに流れゆくかを探るのではない。藝術的意識の客觀性を検査し藝術的統一の必然的法則を求めるのである。藝術

の形式的(法則的)意義をたづねるのは形式の藝術的意義を論ずるのではなく藝術といふ概念をその本質から分析することである。また藝術上の眞を求めるといつても其は眞理が藝術の原理であるかどうかを研究するのではない。藝術の意味に於ての眞理とは何であるかを論ずるのである。問題はどれが藝術的眞理であるかに非ずして何が藝術的眞理であるかに懸る。藝術的活動の意義と本質とが吾々にとつて問題の凡てである。

藝術家の勞作が如何なる意義を有するかは藝術作品の吾々に與へる心的效果によつては見ることできぬ。藝術の本質を理解するために吾々の心的状態や感覺生活に與へられた作品の影響から出立するのは誤つた見方であると言へる。吾々は先づ此等の心理的考察から離れて第一にこの働きの本質を捕捉せねばならない。

藝術的勞作は創造の働きである。創造の働きは

それ自ら統一的にして本源的なる純粹活動である。この働きが自らを實現するために何等かの事物を用ゐるにしてもそれはこの働きが事物を模倣するのではない。この働きが主觀の表現であり主觀に對してあらはれるものであつてもその故にこの作用を心的状態と見感情の移入と考へることはできぬ。藝術創作の過程はあらゆる抽象と移入との以前に横はつてゐる。此過程は自らの作用に於て本源的であり無限であり目的々(zielsetzend)である。創造の作用は何時にそして何處に始まり如何にして意識せらるゝのであらうか。ゲーテの云つたやうに詩人は自己の世界形象を持して生れるのである。創作の活動は時間と空間によつて羈束せらるゝ心理的現象ではない。藝術家は生れて歩行するが如く創つて生れるのである。創作の過程にはテクニストに先だつリズムがあり、形の前に線の動亂があらはれる。

かくの如き活動の欲求はそれ自らに於て持續的である。マレーヌやセザンヌに就て傳へらるゝやうに彼等は如何なる時も如何なる處にも彼等の眼と脳髓とを休めはしなかつた。たゞざる勞作の中に彼等は無限の開展を自らの内容に於て得たのである。藝術的活動が無限であり持續的であるといふのはやがてその活動の終止なきことを物語る。

藝術が終止したといふことは終止した藝術は眞の藝術でなかつたと云ふか——例へば自然模倣説の如く——終止した活動は藝術的活動でなかつたと云ふかに歸着せねばなるまい。孰れにしても藝術と終止とは互に相容れない言葉であると云へる。

藝術の作品は何時仕上るかといふ問ひや作品の仕上つたことは如何なる目標からわかるかといふ問ひなどは描きつゝある畫家によつて皮肉な微笑を以て答へらるゝであらう。それ故藝術創作の本質はその起源を見失ふことによつて眞の起源を見

出しその終末を見失ふことによつて誠の終末を見出すのである。創造の活動は心理的存在の上に出て得らるゝものではない。それは自ら特殊なる空間と時間と因果性とをもつた過程である。その本質は無限の關係に於ける目的の實現である。この目的は實在の世界にはなく、價値の又は價値創作の世界にあるのである。藝術は實在の世界から價値の世界を創作する。藝術的活動は實在の再現又は整序ではなく實在に内在する價値の創作である。ラファエルの言葉によれば藝術とは藝術的價値の *die absolute Gestaltung* でなければならぬ。

然し上のやうに云つただけでは藝術的活動の事實を描寫する價値はあつてもそれを他の種々なる活動から區別して明かに意識せしめるだけの力はないであらう。また藝術的活動はそんなものではないといふ考へを抱いてゐる人(例へばロマンの *L'art ce n'est que l'étude de la nature; nous n'in-*

entions, nous créons rien. と云ふ言葉を淺薄に解釋すれば一見さう思はれるやうに)にとつては上に云つたこともたゞ徒なる空言であるとも見られる。藝術的活動の創造性とは何であるか、またこの働さが他の種々なる精神的勞作とは異つた如何なる特色をもつてゐるか、此等のことを稍詳しく論ずるために先づ吾々の外界に對する關係から出立しやう。

外界といふのはそれが吾々に對して存在する限りは於て成立する。外界とは常に何等かの意味に於て吾々の意識内容である。實在についての吾々の所有は意識の形式を外にしては示すことができない。固より實在が意識内容であるといふのは世界がその本質上我の表象にすぎぬといふ意味ではない。たゞ實在が吾々の考察に入る限り現象でなければならぬといふのである。現象の外に又は以上存在すると考へらるゝ絶對的實在は吾々の間

題となることができぬ。實在は例外なく存在意識の様式又は妥當形式である。即ち吾々の外界に對する關係について言はるゝことは實在の存在價值でなくて實在把住形式の存在價值である。

實在の把住は認識である。認識とは何かといふ重要ではあるが極めて困難な、しかし茲にはさし當つての必要をもたない問題は暫く疎外して置く。概念的思惟はこの實在をつかむ一の方法である。思惟は言葉によつて表現せられるから言葉に結びついた概念は實在の一のあらはれとも見ることができやう。しかし思惟は事物を認識する一の方法ではあつてもそれが實在を捕捉する唯一の方法であるとは云へない。言葉は實在の一の表現ではあつてもそれが實在の唯一の表現であるかどうかはわからない。意識の材料は吾々の感覺の中に與へられる。實在の内容は吾々の知覺である。然しながら意識内容としての知覺はたえず生滅する

流動的過程である。吾々はそこに何等の定形をも捕へることができぬ。言葉と概念とはかくのごとき内的生命をさながらに表現するものであらうか。言葉の成立は意識内容が一定の形式に結晶する統一的過程を示したのではない。全體の材料は依然として定形なき直接の經驗である。言語に於て定つたものは單なる言語それ自らにすぎぬ。意識内容はたえず推移する感覺的過程である。それ故一の感覺を命名することは二の事柄を意識することである。一は形づくられた心象を命名することと他は此命名には無關係な事實的感覚を見ることである。言葉によつて羈束された内容は豊富なる流動に開展し明確なる意識内容としては發達することができぬ。それ故言葉によつて實在の本質を捕捉し得たと信ずるのは却つて之によつて失つた或ものに氣のつかない人である。思惟と概念とは言葉によつて織られたる被蓋物である。實在

の生命はたへずこの壓迫のもとに自らの發展性を緊縮しつゝ何等かの表現を求めて止まぬ。吾々はかくの如き豊富なる生命を表現すべき何等かの方法をもたないであらうか。思惟と言語とは之を表現することかできぬ。概念は生命を開展せずして斃死せしめる。思惟は實在を創作せずして之を教ふのみである。實在を創らずして學ばんとする吾々は實在そのものを所有せずして唯その形式を得るのみではないか。

吾々は事物や感覺を思惟するのではない、たゞ概念を思惟するのである。思惟するのは實在でなくして概念である。概念と感覺とは單なる從屬の關係にあるのではない。感覺は思惟や認識によつて得らるゝ實在把住の前階段とは見ることができぬ。感覺にあらはれたる實在は更に概念によつて開展せらるゝ意識内容ではなく、感覺は概念にふれる最初の瞬間に感覺としての性質が失はれるの

である。精神の發展といふのも感覺の束縛をはなれて精神的自由になることではない。感覺をはなれて概念に移るのは束縛を脱して自由を得ることではなく實在をはなれて言語に羈束せられることである。實在は言語の中に見出されずして表象の中にある。表象は固定した心象に非ずしてたえず生滅する流動である。思惟による實在の認識は吾々の知る唯一の實在たる事はできぬ。凡ゆる概念と思惟とはなれて實在をその直接なる流動に於て捕捉すべき何等かの方法がないであらうか。

この問題を検査するために種々なる認識の中で先づ視覚といふものをとりだして考へて見やう。見るといふことには種々の意味があるが普通にはたゞ物の形とか色とかを吾々の視覚に浮べて見ることである。然し概念の束縛をはなれて實在を純粹に見るといふのは單に事物の表面を眺めることではない。ベルグソンの言ふやうに吾々の知覚は

その純粹なる状態に於ては事物そのもの、一部分である(Bergson; *Materie und Gedächtnis* S55)。眞に見るといふのは見られたる事物と全一となるのである。ブーサンが言つたやうに吾々の物を見るといふ事には二の意味がある。一は單に見ることであるが他は注意を集めて事物の内面を凝視(*contempler*)することである。實在を純粹に見るといふのは言ふまでもなく第二の意味に於て見ることである。即ち色や光を通じて實在にふれることである。色彩の世界に深く没入することである。シヤップの云ふやうに色彩の世界をして自ら吾々の前に體現(*leibhaftig zeigen*)せしめることである。事物を空間に於て見るといふのは單なる色彩を見るのではない、色彩に於て事物をさながら知覺することである。(Schapp: *Beiträge zur Phänomenologie der Wahrnehmung* S21) 事物をさながらに見るといふのは事物を靜止の状態に於て反省す

ることではない、實在の流れに従つて自ら發展することである。見るといふことはそれ故色彩が色彩としてどこまでも發展することに外ならぬ。そしてこの働きこそはやがて藝術的勞作そのものゝ姿ではないか。畫家にとつては見るといふことが凡てである。マレーヌが屢々繰返して言つたやうに見ることを學ぶのが畫家にとつて凡てである。

藝術的活動は視覺による直接なる事物の捕捉を措いて外にはない。視覺にあらはるゝ世界の存在が藝術家にとつて凡ての價値である。(Th. Gautier:

Touta ma valeur, c'est que je suis un homme pour qui le monde visible existe)

見るといふのは單なる生理的現象や光學的出來事ではなく更には單なる心理現象でもない。畫家は常に部分を見ずして全體を見個物を見ずして關係を見、表面を見ずして内面を見る。彼れの見る空間は生きたる空間である。彼れの見る線は凡ての

點に於て直線と曲線との錯綜であり凡ゆる廣袤の緊張である。即ち見るといふのは畫家にとつては思惟概念とはかけはなれて直接なる實在の生命をつかむことである。吾々の意識が視覺に集中し凡ての力が吾々の見るところのものを措いて外に分たれないとき吾々は見るといふことに純一となることができる。即ち見ることがそれ自らそれ自らの爲に發展すべき可能性が見出されるのである。見るといふのはもはや視覺的存在の單なる知覺ではない。視覺的表象の純一無雜なる發展である。實在は固定せる實體でなく視覺にあらはれた光と色との流動である。畫家はものを見るとき彼の視覺領域には自ら發展する視覺表象の外に何ものもないことを知つてゐる。そして何ものをも見ないとき視覺的實在を存在と名けることの如何に無意味なるかをも知つてゐる。即ち畫家にとつては見ることが彼の全體であると共に見るといふ明かな

意識に達するには視覺を措いて他にうつる必要がないのである。事物が如何なる大さをもつてゐるか如何なるものからできてゐるか如何なる表面的形體をもつてゐるかといふやうなこと、即單に一の事物について吾々の知り得ることは未だ事物を深く見たものではない。事物の形體を記述し説明するのは事物を言ひ表すことであつて見られたるそのものを見ることではない。言葉によつて言表されたる事物は視覺から來る材料の外に何ものかを加へてゐる。視覺心象はそのため純一なる發展を妨げられて明確なる意識となることができぬ。この事は言語から適に視覺表象にかへることのいかに困難なるかを見ても明かであらう。それ故藝術家の見るといふのはたえず生滅する實在を流動の姿に於てどこまでも發展せしめることである。そこには何等の概念をも加へずたゞ純粹にそのものとなつて見るのである。ヒルデブランドが區

別したやうに見るといふことに二の種類がある。概念的に事物の位置を定めるといふこと (die diskursive-begrifflichen Orientierung) も一種の見るといふ事實にちがひないが畫家の見るのはかゝる概念的又は幾何學的のものではない。見るといふことを直觀的心象の要素と (Das Sehen als ein in Faktor des anschaulichen Bildes) することである。空間とか時間とかの範疇に當嵌めて見るのではない、凡ゆる範疇と形式との以前に於て直接なる姿を見ることである。畫家の見るのは常人のそれと比べて心理的に單なる強度の差といふやうなことではない。畫家の見るのは單に強く見るといふことではない。視覺の内容に於て新しき意味を發見することである。見られたる事物に於て全く新しき意味を見ることである。ヒルデブランドの言葉をかれば事物の *Das Sein* を見ずして *Wirkungsform* を見るこゝである。(Hildebrand: Das

Problem der Form in der bildenden Kunst S.30) 質は連続である。空間が三次元であるのは外から 畫家の見る事物は抽象的形式でなくして具體的形式である。例へば實在形式を數値と見れば代數に 限界された壓抑の結果ではない、内に發展を藏した充實の姿(Von innen belebter Raum)である。光 於ては凡ゆる數値がかくされて唯々とりとの可能 線の本質は連続である。波及する光を不連続の 的關係があらはされるのみであらう。實在を現象 のと考へるのは光を光として見ないで光の刺戟を 價値になほすことである。指を見るのは單に指を 見るからである、即ち光を物質化して蕪雜なる質 指として見るのではない、指を手に於て見るので 料にあさかへるからである。(Christiansen: Philo sophie der Kunst S.308)

ある。手を見るといふのはたゞ手を手として見る 以上のやうに言ふと或は人あつて次のやうに批 ではない。手を腕との關係に於て見るのである。 難するかもしれない。見るといふことは概念的思 藝術の見方とはそれ故凡ゆる心象を Wirkungs ver 惟とは異つた働きであるとしても視覚が獨立なる halten 又は Wirkungsprodukt として見ることに 存在であるといふのは視覚がそれ自らそれ自らの 外ならぬ。ゲーテが sinnlich-sittliche Wirkungen ために發展することや假定してゐるのではないか

Farbe と言つたやうに色彩の印象は單なる感覺 と。然し視覚がそれ自らとして發展することは假 的知覺に於て竭きるものではない。空間とは單な 定ではなくして直接なる經驗である。見るといふ 幾何學的對象に非ずして平面上に深さをあらは ことの純粹なる體驗を言ひ表したものであつて單 した具體的空間の全體をいふのである。空間の本 なる假定ではない。畫家の見るのは畫家の意識内

容が自らを明確にする過程に外ならない。藝術的活動といふのもこの純一なる作用を外にしては何處に求め得られやうか。

藝術的意味で視覚といふのは單なる心理現象ではなく見るといふ働きの必然的發展であることは略明瞭となつたと思はれるが、それでは此視覚が如何にして一定の存在様式に表現せられ得るかといふことが次の問題となつてくるであらう。このことを検査するために先づ觸覺をとつて視覺の働きと比較して見るのが便利である。觸覺といふのは視覺と同じやうに吾々の感覺であり實在をつかむ一の様式であることは疑ひない。然し觸覺はそれ自ら自らを實現する可能性を有つてゐるであらうか。吾々が觸覺表象を口にするときは常に觸覺をはなれて概念にはいる。固いといふのも柔いといふのも概念である。言葉は觸覺を表現しないが言葉を見つた觸覺は自らを表現すべき何等の方

法をも持つてゐない。自らを自らとして表さうとする觸覺は事物を單に繰返すより仕方があるまい。觸覺の表象は事物をはなれて自ら發展することが出来ないからである。

視覺が觸覺と異なる第一の點は夫れは視覺が感覺的實在を何等かの表現に發展せしむる所にある。

云はゞ觸覺の下に縛られてゐた感覺的能力は視覺の一層高い發達階段にすゝんでそこに表現の力を見出すのであらう。然しこのことは如何にして可能であるか。吾々の思惟は言語に於て表出せられるが見るといふ働きは何に於て表現せらるゝであらうか。思惟が發展して言語となるやうに見るといふことが發展して何等かの存在様式をとるといふのは如何なる意味であらうか。

前にも言つたやうに見るといふことは其れ自ら發展的である。視覺が何等かの表現を得るとすればそれは視覺そのものゝ本質の外に之を求むるこ

とができぬ。見るといふことが存在様式に表出せらるゝのは見るといふ働きそのものゝ發展に外ならぬ。見るといふのは單に眺めることではない。見るといふ働きが自らを表現することである。表現は見る働きに内在し發展は表現の過程に生長するのである。人々はこの要求を模倣衝動とか遊戯衝動とかに結びつけて説明しやうとするが吾々の問題は何故に又は何の爲にこの要求があるかといふことではない。何がこの衝動の中に行はれつゝあるか、この要求とは何であるかといふことである。表現の要求は藝術的意識の本質に横はる。知覺に初まり表出に發展する過程は二つの異つた働きではない。畫家は自己の視覺を手本として之を表現にうつすのではない。見るといふことゝ描くといふことゝは同じ藝術的意識の發展である。見ることゝ表はすことゝは單なる事實としては云ふ

までもなく同一の事柄ではあるまい。見るといふことが同時に描くことであるといふのは描かれぬ繪畫は藝術であるかといふ古めかしい問題に導かれて行く。然乍ら見ることが藝術の全體であるといふのは一見さう思はれるやうに見ることの價値を増大することではなくして見ることを見るといふことに局限することである、見るといふ過程が無限に發展的であるならば何故に唯見るといふ働きに止まるべきであらうか。この事を記憶しつゝ吾々は描くことが見る働きの自らなる發展であると繰返していふ。藝術家は直觀的知覺から直觀的表現にすゝんでゆく。畫家の自然に對する關係は *Anschauungsbeziehung* に非ずして *Anstunftsbeziehung* でなければならぬ。云はゞ藝術は直觀の終るところに始まるのである。吾々も藝術家と同じやうに見ることはできる。然し視覺から表現にうつる最初の瞬間に言ひ得ざる焦燥になやむであら

う。藝術家の生活はこの點に始まるのである。

畫家の描くのは單なる身體的動作ではない。ミケルアンゼロの云つたやうに畫家は手によつて描がずして頭によつて描くのである。見るといふことが單なる精神的過程でないやうに描くといふことも單なる肉體的運動ではない。畫家は自己の製作衝動が身體の諸器官を動かすところに精神的又は藝術的生活の始まることを知るのである。表現に發展しない印象は眞の視覺表象ではない。クローチエの主張するやうに眞の直觀は同時に表現である。表現に自らを客觀化しない。印象は直觀にあらずして單なる感覺にすぎぬ。藝術的に見るといふ働きはそれが自らを表現する限りに於て直觀となるのである (Croce: *Aesthetic* S. 13)。視覺表象と表現とを全く別のものと考へるのは表現といふ語を餘りに狭い意味にとるからであらう。表現とは單に言葉によつて言ひ表される文章を云ふの

ではない。見るといふ働きの自らなる發展を云ふのである。藝術的に深く見るのは見るといふ働きを見るるといふ表現に發展せしめることである。働きは其れ自らに於て既に表現である。見ることが靜的であり描くのが働くことではない。見るといふことが既に働くことである。そして働くことは既に一種の表現であるとすれば見ることゝ描くことゝは同じ藝術的意識のちのづからなる發展でないであらうか。「最後の晚餐」の前に佇んだレオナルドは畫筆を手にながら空しく費す幾日かにデレ・グラチエの寺僧を驚かしたといふ。藝術的活動に於ては見ることを描いて描くといふことがないやうに描くことを外にしては見ることも無意味である。レオナルドの言つたやうに天才は如何なる勞作に於ても常に創造を求めつゝたえず活動するのである。レオナルドとつては描くといふことは見る働きの連續的過程にすぎない。畫家にとつ

ては見るものが凡てと同時に現すことが彼にとつて全體である。藝術が直觀の終るところに始まるといふのは見る働きが終止して描く働きが始まる點に藝術があるといふ意味ではない。見る働きが發展して表現の作用に完成した所に見出されるといふ意味である。見る働きは働きとして既に表現であるから見るといふことは描くことに於て終止するものでない。描くことに於て見る働きは生長するのである。所詮見ることゝ描くことゝは同じ發展的藝術意識の異りたる二面にすぎぬ。

畫家の畫家たる所以は自ら表現に發展する明確なる印象を見るところにある。藝術の本質は純粹なる感情生活の造形的表現になければならぬ、(Haurila: Hauptfragen der Kunstphilosophie. S 102)。

然しながら藝術が表現であるといふのは如何なる意味であるか。表現としての藝術は何を表はし何を造形すべきであらうか。藝術は目的の實現で

あり價値の創作であると云はるゝが此の意味の價値とか目的とかは如何なるものであるか。かく問ふことによつて吾々は藝術的活動の本質を討ねる最後の問題に入るのである。

藝術は何等かの意味に於て常に何ものかの表現でなければならぬ。然し藝術は自然模倣説の主張するやうに單なる實在を再現するものであらうか。表すといふことは見るといふことである。見るといふのは單に自然を自然として見ることであらうか。前にも繰返して云つたやうに見るといふのは單なる感覺を再現することでは決してない。見られたる事物に於て新しき意味を見ることである。表現するといふのは單に見たものをそのまま具象化することではない。見るといふことの必然性を造形することである。思惟が實在の認識に於ては法則を求むるやうに藝術は自然の表現に於て必然性を求むるのである。藝術家の求むるものは

創作の分量に非ずして其の必然性である。畫家にとつては見るといふことが單なる感覺的認識ではない。見るといふことの必然的發展である。藝術家の仕事は單なる事實を記録するところにはない、感性の奥底に與へられた事實の響きを整調する所にあるのである (Alfred de Musset: Non quelle enregistre les faits, elle note seulement le retentissement des faits dans les profondeurs de sa sensibilité.)。畫家の見るのは事物の必然性を見るのである。畫家の描くのは見るといふ働きの必然性を描くのである。そして見るといふことがやがて描く働きであるならば畫家にとつては藝術的必然性といふことが彼等の考ふべき凡てのものとなるであらう。それでは藝術的必然性とか藝術的價值とかは何をいふのであらうか。フイドラーが論じたやうに藝術的必然性とは純粹に見るといふことがどこまでも發展して自らを完全に明現するこ

とに外ならない。必然性といふのもこの働きを外にしては見出すことができぬ。藝術上の必然性は藝術的活動の法則である。見るといふ働きの法則が即ち藝術的必然性である。畫家が描くのは外から與へられた標準によつて働くのではない。見るために見、描くために描く働きそれ自らが藝術的價値の創作であり、藝術的必然性の表現であるのである。畫家は自己の純粹なる直觀が凡ゆる部分に於て明確なる意識に發展するまでは彼れの藝術的活動を止めないであらう。完全に明確となるのは即ち必然的となることである (Fiedler: Vollständige Klarheit und Notwendigkeit fallen zusammen.) 明確といふのは單に心理的意識の強度をさしたのではない、視覺表象の必然性を意味したものである。見るとが完全に明かになるのは見る働きの必然的發展が十分に完成されたことである。即ち藝術的活動が完全なる自由を得たことである。畫

家が自然を模倣するのは自然に屈從することであつて自然を表現することではない。自然を表現するのは實在を再現することではなくして創作することではなければならぬ。見るといふのは自然に於て自然を創作することである。自然を創作するといふのは藝術的意識がそれ自らそれ自らの爲に發展し、自己の本質にかへつて自由となることである。クロイチエの云ふやうに表現とは自由なる *inspiration* である。藝術とは自然の再現でなくして創作であるといふのは吾々に與へられた種々なる印象や感覺が藝術的意識に於て選擇せられることであらう。さうして選擇といふのは何等かの形に於て表現せらるゝことであるとするれば藝術的活動とは自然に對して何等かの意味を吹きこむことではなければならぬ。即ち見る働きが表現の働きに發展することに外ならないのである。

見ることが描く働きに發展するのは自然を脱し

て自由となることである。自然を脱して自由となるのは自然に背いて空想の世界に入ることではない。藝術的意識の必然性に從ふことである。畫家にとつては見る働きの必然性に從ふのが眞に自由を得る所以である。自由と必然とは藝術的活動に於ては別のものではない。必然といふものは見るといふ可能性が表現の働きに實現せらるゝ過程に外ならない。見ることゝ描くことゝが全く別のものであるならば藝術の領域には必然の世界がない筈であらう。然し畫家の仕事は創造の働きである。働きは見るといふ可能性の自らなる表現である。可能性がやがて表現となる働きは藝術的活動の必然的發展に非ずして何であらうか。セザンヌの畫は彼れの藝術的活動の表現である。彼れの用ゐた色は彼れの見た色の必然的發展である。セザンヌの作品は如何なることがあつても彼れによつて描かれた作品を外にしては現れることができない。

彼れの作品から一線をとり一色を去つてもそれはもはやセザンヌの藝術ではない。セザンヌの藝術でない作品は果して藝れの藝術であらうか。必然といふことは或る働きがそれ自ら自らの爲に働くことである。即ち眞に自由となることである。藝術的必然性とは藝術的意識がどこまでも自己を自己として表現することに外ならない。藝術を創作するといふのは藝術的價值を絶對的に表現することである。絶對的に表現するといふのは藝術的意識の必然性が自らを造形することに外ならぬ。藝術的價值が本源的であり自律的であるといふのも (Christiansen : Die Autonomie der ästhetischen Worte) 此の意味を外にしては理解することができない。藝術上の必然とは藝術が自然に従ふ點にあるのではなく自然が藝術に従ふ所に存するのである。藝術が自然の形式に於て現はれるのでなく自然が藝術の形式に於て表されるのである。畫家

の自然を見るのは自然を單なる自然として見るのではない、自然に於て自然を讀むことである。自然を讀むといふのは調和の法則に従つて流動する色彩の意味によつて自然を見ることである。畫家の描くといふのは單に自然を自然として表現することではない。自然に於て見、自然によつて感じたものを論理的に發展せしめることである (Cézanne : Je vais en développement logique de ce que nous voyons et ressentons par l'étude sur nature) 論理的といふのは概念的に思惟することではなく見る働きの必然的發展を意味したものであらう。セザンヌの偉大なる點は彼れの藝術的意識がこの意味の必然的表現を得た所にあるといへる。彼れは圖式スキームを表さずして常に生命を描いた。彼れの表現したものは單なる Formel に非ずして常に Form であつた。彼れの見たものは單なる自然でなくして常にその必然性であつたのである。ホドラーは

彼れの體驗の物質性から蟬脱し得なかつた畫家である。彼れの描いたものは藝術的必然性でなくして自然の物質性であつた。然しながら藝術は自然の物質性を離れて藝術的價値の絶對的表現に入る所に始まるのである。ランファエルの言葉をかれば、藝術的活動は *Entmaterialisierung* の働きであり、*Verabsolutung* の作用でなければならぬ。自然は藝術の従ふべきものでなくして藝術によつて使用せらるべきものである。藝術的意識とは自然を材料として自らを表現する過程でないであらうか。

見るといふことは概念的思惟を離れて實在の生命をつかむことである。實在の生命は常に何等かの形をとつてあらはれる。見るといふのは即ちこの形を表現することに外ならない。單なる形を見る人は單に抽象を思惟する人である。單なる生命を感じる人は單に印象を感覺する人である。藝術

は見るといふ働きが何等かの形ちに表される所に生れるのではないであらうか、(Schiller: *Aesth. Briefe*, Bf. 15) 藝術的活動は見るといふことである。見るといふのは見るといふ働きを表現することである。見るといふことを表現するのは見るといふ働きの必然性を表すことに外ならぬ。藝術とはそれゆゑ見るといふ働きの必然性を純粹に表現したものであり藝術的價値の絶對的造形でなければならぬ。(Sehen — *Gestaltung* — *absolute Gestaltung*)。